

テレビをつけると、非常に軽い3人が活躍しています。（三太郎シリーズ：最近では、人数がもっと増えています）昔話のヒーロー、これはヒーローではなく英雄（au）でないとはいけなのですね。昔話の英雄は、落ち着いた常識人であって欲しいのですが、テレビ



で活躍する3人は、非常に軽い3人組に仕立て上げられています。

携帯電話とはそういうノリで使って欲しいということなのかもしれません。いろんなことを感じさせてくれる、とてもよくできたCMです。

中でも、一番軽いお調子者として描かれているのが、浦島太郎です。我々の持つ、浦島太郎の暗いイメージを根底から覆してくれるキャラクター設定です。「ああいう奴いるよなー」っていう感じが引きつけるのかもしれません。

私たちが知っている浦島太郎は、『昔、昔、浦島は助けた亀に連れられて、竜宮城に来てみれば絵にもかけない美しさ』という歌でおなじみの世界です。浦島太郎は、浜で子供達にいじめられている亀を助けてあげます。すると、亀が竜宮城につれていってくれて、乙姫様が歓待してくれます。

楽しくて月日を忘れあつという間に3年が過ぎますが、故郷が恋しくなって家に帰ります。乙姫様は、「開けてはダメですよ」という玉手箱をお土産に持たせます。浜につくと、景色は変わり知らない人ばかりです。浦島太郎という人は300年前にいた人の話だとわかります。そして、玉手箱を開けると煙がでてきて、浦島太郎は、みるみるうちにおじいさんになってしまいます。

この話、ちょっと変だと思われたことはないですか？

浦島太郎はいじめている亀を助けた人です。竜宮城に連れて行ってもらい恩返しをされたまでは良いのですが、渡されたお土産の玉手箱。「開けちゃいけない」箱を、乙姫さんはどうして渡したのでしょうか。誰だって、開けちゃだめと言われると開けたくありませんよ。

そして、開けてしまった浦島太郎はおじいさんになってしまいます。それってあまりにも可哀想ではないですか。亀を助けたばかりに、実質3年間しか生きられなかったなんて、なんて残酷な話なんなのでしょうか。

浦島太郎のこの話は、何年もの年月を経て、末梢のくだりが変化して今の形に落ち着いたもののようです。多分、もともとの話は違ったのだと思います。それを無理やり変えてしまったから、こんな理不尽な話になってしまったのです。

子供に分かる話に変えたことが一番大きいのかもしれません。

私たちが知っているストーリーは、明治になり国定教科書に載った話の筋であり、国民全てがこの教科書を使って勉強したために日本中にひろまったということのようです。

浦島太郎の元の話はどんなはなしだったのでしょうか。そもそも、発祥の地はどこなのでしょう。室町時代や江戸時代にも、御伽草子として本となっていたことから、日本の各地に浦島太郎の伝説の地が作られているようです。

香川県三豊市詫間町にある丸山島という無人島には浦島神社があります。この地に残る浦島伝説では、生里（なまり）という場所で太郎は生まれます。現在、荘内半島というのですが、この地を昔は浦島と言ったのだそうです。

亀を助けた場所が「鴨の越」と呼ばれる場所で、太郎は「どんがめ岩」と呼ばれる場所で釣りをしていると亀が迎えに来たと言います。玉手箱を開けた場所は「箱」と呼ばれる場所で、今はここに浦島太郎の墓があります。地名とも連動してよくできているのですが、この地が発祥の場所ではないようです。郷土史家の三倉重太郎が昭和23年に発表したのが契機。

実はこの浦島太郎の話は日本書紀にも載っているのです。雄略天皇の22年、丹波国余社郡の管川の人で、端江浦島子が舟に乗って釣をしていた。そして大亀を釣り上げた。釣られた亀は女に化けてこの子の前に現れた。浦島子は魅せられてついて行き、2人で海に入ってしまった。蓬莱山である常世の国に到って、仙人に会い各地を巡った。物語は別巻に収められている。と、記載されています。

別巻を読みたいと思うのですが、日本書紀に別巻はありません。さては古事記のことかと思いましたが、古事記には浦島太郎の話はありません。日本書紀の編纂が完了したのは720年のことですが、それより以前の713年に風土記の編纂が命じられています。

「釋日本紀」に残されている「丹後国風土記」には、この浦島太郎の話が詳しく残されています。

筒川の里、日下部首等の先祖に姿容秀美の筒川嶋子（しまこ）という者、即ち水江浦島子がいた。浦島子は小舟に乗り釣りに出た。三日三晩の間一匹の魚も釣れなかったが五色の亀だけ釣り上げた。眠っている間に、亀は他の誰よりも美しい婦人になっていた。その娘は問答の中「天上仙家之人也」と自分のことを語った。彼女が眠るように命じ、浦島子はそれに従った。

目が覚めると、海中の大きな島に至っていた。館の門に入ると七人の童子、八人の童子が迎えるが彼らはそれぞれ「すばるぼし」と「あめふりぼし」だという。娘は父母と共に迎え、歓待の合間に人界と仙都の別を説いてくれた。館に留まること三年経ち、浦島子は郷里の事を思い出し、神仙之堺に居るよりも俗世に還ることを希望するようになった。

娘は別れを悲しみながらも、玉匣（たまくしげ）を渡し「戻ってくる気ならゆめゆめ開けるなかれ」と忠告しました。帰り着いて辺りが変わっているので郷の者に聞くと、浦島子は蒼海に出たまま帰らなかったということにされていた。

こうなってくると、不思議だった残酷な物語の意味もとけるのです。元々亀を助けたわけではなく、三日間なにも釣れず仙人の住む世界に入ったわけです。常世の国であったのかもしれませんが。つまり死後の世界の中で、現世に戻ることを許された。その時、また帰ってくる時に使うための玉匣（たまくしげ）をもらった。にもかかわらず、彼はなぜか現生にとどまることを選択し老いてしまったという話です。玉匣は、櫛などの化粧道具を入れる美しい箱のことです。

この話を聞いて思いこされるのが、徐福の伝説です。日本では弥生時代が始まる頃、中国の秦の始皇帝(BC259-221)に仕えていた徐福は、東の海に蓬萊（ほうらい）・方丈（ほうじょう）・瀛洲（えいしゅう）という三神山があって仙人が住んでいるので不老不死の薬を求めに行きたいと皇帝に申し出て旅立ちます。一度目は失敗、二度目は3000人の人々ともに、東へと旅立ち戻ってきませんでした。

中国から東に旅立ち辿りついた地は、多分、日本でしかありません。弥生時代日本に米を伝えた集団こそが、徐福であったかもしれないのです。彼らによって縄文の日本は、弥生文化、稲作文化の時代を始めることになります。九州に辿りついた一団は、いくつかの集団に分かれたのだと思います。一部は、そのまま日本海に抜けたのかもしれませんが。そして、彼らが辿りついたのが、丹後の地であったというのは決して絵空事ではないように思うのです。

仙人の存在、蓬萊山という地名には、道教の世界が描かれています。何も情報のない場所に道教の世界が広がるわけではありません。もちろん、日本書紀にしろ、風土記にしろ編纂されたのは8世紀になってから。その頃の日本には、中国文化も深く行き渡っていたかもしれません。このため、編纂者が作り込んだとも考えられます。

しかし、日本書紀が丹波国余社郡の話として記載し、丹後国風土記に残されていたのは、確実にその地に伝わる伝承があったからだと思われます。丹波国余社郡は、今、京都府与謝郡として地名を残しています。

雄略天皇の頃といえは5世紀。古墳時代の象徴として残される古墳では、丹後半島にある墳丘長190メートルの前方後円墳である神明山古墳が築かれたのがこの頃です。この近くにある竹野川、そして竹野神社は竹野媛の伝説を残す場所です。古事記にでてくる、旦波（たんば）の大縣主（おおあがたぬし）、名由碁理（ゆごり）の女、竹野比賣（たかのひめ）は日本の第九代天皇の開化天皇のお妃となりました。

丹波王国として栄え、かつ、欠史八代の時代に妃を出すほどヤマト政権にも影響を及ぼした古くからの大国には、徐福集団の一部が住みつき、豊かな国を起こしたのかもしれませんが。その時伝えられた道教の世界が、浦島子の話を作り出したのではないのでしょうか。

「すばるぼし」と「あめふりぼし」はともに中国の二十八宿の西方白虎の真ん中に並ぶ星です。西の端から入って東へと進むという意味なのではないでしょうか。いずれにしても、中国思想の中で物語が描かれているのです。

しかし、浦島子はどうして、玉匣（たまくしげ）を開けてしまったのでしょうか。自分の居場所がないと気づいた時点で、また、常世の快樂の地へと戻ろうとしなかったのはなぜでしょうか。そうすることが、人の道であるという戒めなのではないでしょうか。現実の世の中で、いろいろと苦労しながら年老いていくことが本当の生き方なのだよと教えようとしているのかもしれませんが。不老不死の薬など存在しないのだという結論に辿りついた徐福の教えのようにも聞こえるのです。

さて、以上が浦島伝説のあらましですが、あらためて日本書紀・丹後国風土記に登場する浦島伝説を見てみます。

浦島太郎の伝説が記されている最も古い書物は、先述しました『日本書紀』と『丹後国風土記』です。日本書紀の完成は720年で、丹後国風土記も8世紀にはできていたと考えられていますから、ほぼ同じ頃に成立しています。

ただし日本書紀と丹後国風土記の浦島伝説は、一般的に知られる物語とは多少異なっているのです。

日本書紀では、丹波（丹後）の余社郡（現在の京都府与謝郡／古代は丹後も含まれ713年に分離）の浦嶋子（浦島太郎）が舟に乗って釣りをしていると、大亀を捕らえます。するとこの亀はたちまち女性の姿になったので、浦嶋子はこの女性を妻にします。浦嶋子と女性は海中の「蓬莱山（ほうらいさん／とこよのくに）」に行き、各地を巡って仙人たちに会います。

丹後国風土記でも、浦嶋子が亀を捕らえてその亀が女性となるのは日本書紀と同じです。この女性は浦嶋子に会いにやって来たと言います。そして海中の「蓬莱山」に行くのですが、女性は「亀比売（ひめ）」という仙界の娘（神女）で、浦嶋子は亀比売と夫婦となり3年を過ごします。しかし故郷に帰りたくなった浦嶋子は亀比売と別れることを決意すると、亀比売は「ここに戻りたいなら決して開けてはいけない」玉匣（はこ）を渡します。

あとは一般的な浦島太郎のストーリーと同様ですが、亀比売と暮らした3年は300年以上も経過していたのでした。

このように日本書紀と丹後国風土記では、浦嶋子は「蓬莱山」に行くのであって「龍宮」ではありませんし、乙姫も龍神の娘ではなく亀比売という神女です。龍神の娘ではなく亀の姫だった？

日本書紀と丹後国風土記に出て来る「蓬莱山」は「とこよのくに＝常世の国」という読みがされています。「常世の国」とは、古代の日本で信仰された海の彼方にあるとされる、理想郷とも考えられる異世界のことです。

これに紀元3世紀頃に中国の山東半島を中心に起こった神仙思想の、東の海の彼方にあるという「蓬莱山」の文字があてられています。

どちらも「不老不死」や「永久不変」といった考え方がある場所ですから、これが浦島太郎伝説の大きなモチーフとなっている訳です。

それでは、この「常世の国」がどうして「龍宮」になったのでしょうか？

実は浦島太郎の物語が現在の一般に知られるような内容に近いかたちで語られるのは、中世の「御伽草子」（鎌倉時代末から室町時代、江戸時代にかけて成立）なのだそうです。

ここではじめて、助けた亀の恩返し、龍宮城、玉手箱といった主要な要素がでてきます。ただ浦島太郎と龍宮城で暮らす姫はやはり亀の化身で、後に龍神の娘または妻とされる乙姫ではありません。ちなみに御伽草子の浦島太郎物語では、最後に玉手箱を開けて老人となった浦島太郎は鶴となって蓬莱山へと飛び去り、亀の姫も蓬莱山へ行ってふたりは夫婦となります。鶴と亀の夫婦が長寿を示しているということです。

「浦島太郎」という話は、「昔むかし浦島は助けた亀に連れられて……」という尋常小学唱歌や国定国語教科書などで多くの日本人に親しまれ、現在でも昔話や絵本として語り継がれ読み継がれています。

この話が、子供たちに苛められている亀を助け、お礼に龍宮城に連れていってもらったという展開をとるようになったのは意外に新しく、1896（明治29）年に発表された巖谷小波（いわや さざなみ）作の『浦島太郎』（『日本昔噺』第18編）であり、唱歌も国定教科書もこの作品を元にしており、いわゆる口承の昔話ではなかったようです。

もちろん、浦島太郎を主人公とする話は古くから伝えられているが、時代やジャンルによって差異が大きく、文学史的な展開を追ってゆくだけでも興味深い問題がさまざまに見出せる。たとえば、恩返し（「報恩説話」）のモチーフをとるようになったのは中世に書かれた室町短編物語（いわゆる「御伽草子」）以降のことで、そこでは太郎が釣り上げた亀を自ら放生してやったと語られている。また、浦島太郎や乙姫、龍宮や玉手箱などといった馴染み深い名称が登場するのも、中世短編小説以降のことで、それ以前の浦島説話は我々の知っている話とはずいぶん違った内容で伝えられています。

現存する文献でもっとも古い浦島説話は『日本書紀』雄略天皇の巻に発端部分だけが記載されているが、その全容は『丹後国風土記』逸文によって知ることができる。雄略天皇の時代、丹後国の水江浦島子という人物が海で五色の亀を釣り、舟に置いて眠っていると美しい女に変身している。女は仙都の者だと名告り、島子を蓬莱山に誘う。仙女に連れられて蓬莱山に行った島子は仙女と3年間の結婚生活を過ごす。

ところが故郷が恋しくなり帰りたいと言うと、女は決して開けるなというタブーを科して玉匣（たまくしげ）という箱を渡す。地上に戻った島子は人間の世界では300年以上もの時間が経過していたことを悟り驚愕し、我を忘れて玉匣を開くと、瞬間的に若々しい体は天空に飛び散ってしまった、というような内容で語られている。

それは古代中国で流行した伝奇的な「神仙説話」の影響の濃い表現をもつもので、浦島子と仙境の女との恋物語として語られ、「異郷」と人間界との3年対300年という時間意識を鮮明にした古代にあっては非常に目新しい物語だったのです。しかも『丹後国風土記』逸文によれば、その内容は伊預部馬養という人物が書いた作品を元にしたものだであり、浦島説話が「民間説話」として語り伝えられていたとみるには疑問点が大きい。

その伊預部馬養という人物は7世紀後半の官人で、『律令』撰定や史書編纂に携わり、『懷風藻』に漢詩も伝えられる当代一級の知識人であった。雄略紀や『風土記』など奈良朝の浦島説話はこの人物によって書かれた神仙的な伝奇小説であった可能性が大きいと考えられています。ただし、この見解には反論も根強く、丹後地方で語られていた民間伝承にその発生をみようとするのが現在の通説となっています。

なお『万葉集』巻9に高橋虫麻呂の詠んだ叙事的な長歌と反歌（1740～1）があり、そこでは亀が登場しないなど漢文体の浦島説話とは異質だが、神仙的な色彩が強いという点からみて馬養の作品を元に作歌したとみられる。

万葉集その三百二十二(浦島伝説)

名文の誉れ高い高橋虫麻呂の浦島物語は次のような出だしから始まります。

「 春の日の 霞(かす)める時に 住吉(すみのえ)の 岸に出(い)で居て
釣舟(つりぶね)の とをらふ見れば いにしへの ことぞ思ほゆる 」
「とをらふ」＝「たわむ」ここでは釣り舟が波の間に上下して揺れ続けている意。

(春霞がかかっている麗(うら)らかな日に、住吉(すみのえ)の岸に出て
釣り舟がゆらゆら揺れているのを見ると おのずと昔のことが思われます)

この一節は導入部。

まず、遠くいにしえを回想する舞台装置に春の日の霞と釣り舟のたゆたいを持ち出し、
『 映画の画面でゆらゆらと画面をゆらしながら回想の世界に筋が運ばれてゆくのと
同じ手法 』(中西進)を用いた心憎い演出です。

なお、現在伝えられているお伽話は京都丹後の国が舞台ですが、虫麻呂のは摂津の住吉となっています。

「 水江(みずのえ)の 浦の島子が 鯉(かつを)釣り 鯛釣りほこり
七日まで家にも来(こ)ずて 海境(うなさか)を 過ぎて漕ぎ行くに

海神(わたつみ)の 神の女(をみな)に たまさかに い漕ぎ向かひ
相(あひ)とぶらひ 言成りしかば かき結び 常世(とこよ)に至り
海神の 神の宮の 内のへの 妙なる殿(との)に たづさはり
ふたり入り居(い)て 老いもせず 死にもせずに 長き世にありけるものを」

「たまさかに」：はからずも

「相とぶらひ」：愛の言葉を交わしあい

「かき結び」：契りを結び

(水江(みずのえ)の浦の島子が、鯉(かつを)や鯛を釣っているうちに、大漁となって調子づき、7日も家に帰らず、とうとう海の境を通り過ぎてしまった。

なおも漕いでゆくうちに、海神(わたつみ)の神の娘の漕ぐ舟とたまたま出逢い、

一目見て二人はたちまち意気投合して求婚し合い、話がうまくまとまったので、夫婦の契りを結んで常世(とこよ)の国まで一緒に赴いた。

そして、海神の神の宮の、奥にある、善美を尽くした宮殿に二人ともに住み、老いもせず死ぬこともなく永遠に生きていたのに、)

虫麻呂の話では、いじめられる亀や、鯛、ヒラメの踊りは登場しません。

大漁で釣り誇っているうちに時を忘れて無我の境地。

ふと気がつくと、そこは海と常世との境界。

そこへ現れた乙女は絶世の美女、海の神の娘です。

あっという間に意気投合して二人は結婚。

浦島も容姿端麗の美丈夫だったのでしょう。

「世間(よのなか)の 愚か人の 我妹子(わぎもこ)に 告(の)りて語らく

しましくは 家に帰りて 父母に 事も告(の)らひ

明日のごと 我れは来なむと言ひければ

妹が言へらく 常世辺(とこよへ)に また帰り来て 今のごと

逢はむとならば この櫛笥(くしげ) 開くなゆめと

そこらくに 堅(かた)めし言を 」

「しましくは」： しばらくの間

「櫛笥(くしげ)」： 櫛を入れる小箱。古代、櫛には靈魂がこもるとされた

「開くなゆめ」： (開けると呪力が失われるので) 決して開けないで下さい。

(この男、世にも愚かな人間よ。愛しい妻に告げて言うには、

『ちょっとの間、家に帰って父母に事情も話し明日にでも帰ってこよう』と
言ったので、妻は、

『常世の国へまた帰ってきて、今のように私に逢おうと思うならば、

この櫛箱を決して開けてはなりませぬ』 と、くれぐれも堅くいましめたのに、)

「なんと愚かな人間なのだろう」という作者のため息が聞こえてくるようです。

「 住吉(すみのえ)に 帰(きた)りて 家見れど 家も見かねて
里見れど 里も見かねて あやしみと そこに思はく 家ゆ出(い)でて
三年(みとせ)の間に 垣(かき)もなく 家失(う)せめやと
この箱を 開けて見てば もとのごと 家はあらむと 」

(住吉に帰りついても家は見当たらず、里も見当たらず、怪しいことだと
不思議に思い、そこで思うに、
「 家を出て三年、その間に、垣根もなくなり、家も失せる、そんなことが
あり得ようか。 この箱を開いてみたら、元通り家もあるだろう」と)

あれだけ妻が固く戒めたのに浦島はとうとう箱を開けてしまうのです。

「玉櫛笥(たまくしげ) 少し開くに 白雲の箱より出でて
常世辺(とこよへ)に たなびきぬれば 立ち走り 叫び袖振り 臥(こ)ひまろび
足ずりしつつ たちまちに 心消失(こころけう)せぬ
若くありし 肌も皺(しわ)みぬ 黒くありし 髪も白(しら)けぬ ゆなゆなは
息さへ絶(た)えて 後(のち)つひに命死にける 」

「ゆなゆなは」後々、やがては

(美しい櫛箱を少し開くと、白雲が箱から出て、常世の方へたなびいていったので、
引き留めようと、立ち走り、叫びながら袖振りまわし、ころげ回り、地団駄を
踏みながら、たちまち気を失った。
若々しかった肌も皺ばみ、黒髪も白くなった。
やがては息さえふつとりと絶え、後には死んでしまったのです。)

白雲は常世の神だけが持っている呪力が込められている雲、
その雲が常世の国へ戻ってしまった。
呪力が失われた浦島はたちまち現実の世界に戻され、あっという間に生命力が失われて
気絶して倒れ、やがて死にいたります。
何しろ常世にいる間に何百年も経っているのですから。

「 水江(みずのえ)の 浦の島子が 家のところ見ゆ 」
巻9-1740 高橋虫麻呂

(このように伝えられている水江の浦の島子の家の跡が見えるのです。)
ここで現実に戻り、作者の回想が終わります。

「反歌」

「 常世辺(とこよへ)に 住むべきものを 剣太刀
汝(な)が心から おそやこの君 」

巻9-1741 高橋虫麻呂

「おそや」 愚かな

「剣太刀」 枕詞。 古来、刀を「な」といったことから同音の「汝：な」に掛かる

(常世の国に いつまでも住める身であったのに
自分自身の浅はかさから そんなことになって
なんとまあ 愚か者であることか。この浦の島子の君は)

浦島を繰り返す「愚か者」と詠う虫麻呂は、一体何を伝えたかったのでしょうか？

現世で執着心を持つことへの愚かさや人間の弱さ、切っても切れない親子の関係、そして何人といえども避けることが出来ない老や死。

さればこそ、その心の奥底には不老不死のまま絶世の美女とともに暮らしたいという男の儚い願望も窺われるように思われるのです。

解説：伊余部 馬養（いよべの うまかい）は、飛鳥時代の貴族・漢詩人。氏は伊与部・伊豫部、名は馬飼とも書く。姓は連。位階は従五位下。伝承的な童話『浦島太郎』の作者とされる。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：高橋虫麻呂（たかはしの-むしまろ）奈良時代の歌人。

天平(てんぴょう)4年(732)藤原宇合(うまかい)が西海道節度使となったときおくれた歌や、「高橋連(むらじ)虫麻呂歌集」中の34首などが「万葉集」にみえる。

出典：デジタル版 日本人名大辞典+Plus

こうした漢文体の浦島子の物語は平安時代になってもさまざまに書き継がれており、『続浦島子伝記』（10世紀初期）『本朝神仙伝』所収「浦島子伝」（11世紀後半、大江匡房編）『扶桑略記』所収「浦島子伝」（11世紀末）『古事談』所収「浦島子伝」（13世紀初期）などがその代表的な作品です。

内容は少しずつ違いますが、神仙的な色彩の濃い内容を持ち、仙女と浦島との恋と時間の差異を主題にして語られているという点では古代以来の浦島説話と共通しています。

また12世紀以降になると、『俊頼髓脳（としよりずいのう）をはじめ『奥儀抄（おうぎしょう）』『和歌童蒙抄（わかどうもうしょう）』など歌論書に浦島説話が紹介されるようになります。それは仮名で書かれていることもあり、宮廷や貴族たちの間に浦島説話をより広く浸透させたと思われます。

さらに、丹後地方では浦島明神と呼ばれる神社が浦島子を祭り、人々の信仰を受けるようになり。これも、中央の浦島説話の流行と呼応するかたちで現れてきたものと考えられ、

そして中世には、能や狂言として演じられることにもなって、先述の御伽草子とともに浦島説話をポピュラーな作品にしていってと考えられます。(参)重松明久『浦島伝』1981、現代思潮社、三浦佑之『浦島太郎の文学史』1989、五柳書院

次に、日本書紀 卷第十四 より、浦嶋子（うらしまのこ）を表記（抜粋）します。

大泊瀬幼武天皇（おほはつせのわかたけのすめらみこと）

雄略天皇（いうりやくてんわう）（使用したテキストは、岩波文庫 日本書紀 坂本太郎・家永三郎・井上光禎・大野晋 校注による。）

廿二年春正月（むつき）己酉（つちのとのとり）朔（ついたちのひ） 以白髪皇子（しらかのみこ）爲皇太子（ひつぎのみこ）

秋七月（ふみづき） 丹波國（たにはのくに）餘社郡（よぎのこほり）管川（つつかは）人瑞江浦嶋子（みづのえのうらしまのこ） 乗舟而釣 遂（つひ）得大龜（かめ） 便（たちまち）化爲（なる）女（をとめ） 於是 浦嶋子（うらしまのこ）感（たける）以爲婦（め） 相（あひ）逐（したがふ）入海 到蓬萊山（とこよのくに） 歴（めぐ）る 覩（みる）仙衆（ひじり） 語（こと）在別卷（ことまき）

廿二年の春正月の己酉の朔(478.01.01)に、白髪皇子を以て皇太子とす。

秋七月に、丹波國の餘社郡の管川の人、瑞江浦嶋子、舟に乗りて釣す。遂に大龜を得たり。便に女に化爲る。是に、浦嶋子、感りて婦にす。相逐ひて海に入る。蓬萊山に到りて、仙衆を歴り覩る。語は、別卷に在り。

白髪皇子は葛城圓大臣の女、韓媛との間の子、白髪武廣國押稚日本根子天皇（しらのたけひろくにおしわかやまとねこのすめらみこと）（元年条）。白髪皇子を皇太子にすることで、葛城の勢力との関係改善が図られたことになろう。半島での活動を行うには、この勢力の協力は欠かせなかったと思われる。

前述の、万葉 1740 の長歌によれば、

住吉の水江の浦島児（子）が釣りに出、神の女（むすめ）と出会ひ、契りを交はし、常代（とこよ）に至り神の宮で永世（とこしへ）の生を得た。 とあります。

しかし、三年を経て、残してきた妻、父母のことが忘れられず、決して開けてはいけないといふ玉手箱を持参して住吉に戻る。すっかり様相の変わっていた故郷の光景に不安になり、箱を開ければ元に戻るのではないかと、開けたところ顔は皺だらけ、髪は白まだらとなり、息絶えて寿命を終えた。この男、永遠の生を手にしなから、なまくら刀のごとく、なんと鈍臭いことをしたものか。

「水江浦嶋子の一首 并（あは）せて短歌を詠む。

春の日の 霞める時に 墨吉（すみよし）の 岸に出で居て 釣船の とをらふ見れば
古の事ぞ念（おもほ）ゆる。水江の 浦嶋児が 堅魚（かつお）釣り 鯛釣り矜（ほこ）

り 七日に及び 家にも來ずて 海界（うなさか）を 過ぎて榜（こ）ぎ行くに 海若（わたつみ）の 神の女（むすめ）に 邂（あふ）に い漕ぎはしり 相ひ誂（かた）らひ 言（こと）成りしかば かき結び 常代に至り 海若の 神の宮の 内の隔（へ）の 細有る殿に 携（たづさ）へて 二人入り居て 耆（おい）もせず 死にもせずして 永世（とこしへ）に 有りけるものを 世間の 愚人の 吾妹兒に 告（の）りて語らく 暫らくは 家に歸りて 父母に 事も告（かた）らひ 明日の如に 吾は來りなむと言ひければ 妹が答へらく 常世邊に 復（ま）た變り來て 今の如 相（あ）はむとならば 此の篋（はこ）を開くなゆめと そこらくに 堅めし事を 墨吉に 還り來りて 家見れど 宅も見かねて 里見れど 里も見かねて 恠（あやし）みと そこに念（おも）はく 家より出て 三歳（みとせ）の間（ほど）に 垣も無く 家滅（うせ）めやと 此の篋（はこ）を 開きて見ては 本の如 家は有らむと 玉の篋 小（すこ）し披（ひらく）に 白雲の 箱より出て 常世邊に 棚引（たなびき）去れば 立ち走（わし）り 叫び袖振り 反側 足づりしつつ 頓（たちまち）に 情（こころ）消（け）失（う）せぬ 若かりし 皮（はだ）も皺（しわ）みぬ。黒かりし 髪も白斑ぬ。 ゆなゆなは 氣（いき）さへ絶（たへ）て 後ち遂に 壽（いのち）死にける 水江の 浦嶋の子が 家とところ見ゆ。

反譌 常世邊に 住むべきものを 劔刀（つるぎは） 己（な）が行（こころ）から 鈍（おそ）や是の君」とある。

また、**釈紀（しゃくにほんぎ）、述義所引丹後風土記逸文**によれば、与謝郡・日置里、筒川村の日下部首（おびと）等が先祖の筒川島子（水江浦島子）といふ大変風流な男が釣りに出て、五色の亀を得る。うたた寝から覚めると、亀は女（むすめ）と化していた。それは亀比売といふ神女であり、この風流の士を海中の蓬莱山の仙都に誘った。比売の7人子供は昴宿、8人子供は畢宿、神の仙都で歓迎を受け、比売と契る生活が三年が過ぎた。あとの展開は万葉集と似ているが、それははるかに精緻である。

「丹後國風土記に曰く。与謝郡。日置里。此の里に、筒川村有り。此の人夫、日下部首等先祖、名を筒川嶋（嶋）子と云ふ。人となり、姿容秀美、風流無類。斯れ、所謂水江浦嶋子といふ者なり。是は、旧の宰（丹後が分離される前の丹波國の宰）、伊預部馬養連（いよべのうまかいのむらじ）が、記せるに相ひ乖（そむ）くことなし。故、陳（の）ぶ所の由の旨を略す。

長谷の朝倉宮の御宇天皇（あめのしたしらしめすすめらみこと）の御世に、嶋子独り小船に乗りて、海中に汎（う）かべ出で、三日三夜を経るも、一魚をも得ざるに、乃ち五色龜を得たり。心、奇異（くし）び思ひ、船中に置きて即ち寐ねる。忽（たちまち）にして婦人となりぬ。其の容、美麗にして更に比ぶべからざる。嶋子問ひて曰（まう）す、「人宅は遙か遠く、海庭に人乏し、詎（なん）ぞ人忽に來たるか」。女娘（をみな）、微咲（ほほえ）みて對（こた）へて曰す、「風流の士、獨り蒼海に汎（う）かぶ。勝（あ）げて近く談（かた）らざるか、風雲に就（つ）きて來る」。嶋子復た問ひて曰す、「風雲何處ん

ぞ来る」。女娘答へて曰す、「天上の仙家の人なり。請ふ君、な疑ひそ。相ひ談（かた）らふの愛を垂れめ」。爰（ここ）に嶼子神女と知り、懼疑の心鎮めり。女娘語（かた）りて曰す、「賤妾の意（私の気持ち）は、天地と共に畢（お）へ、日月と俱（とも）に極めんと（貴方と永久に一緒にになりたい）。但（ただ）君奈何にぞ、先に許不の意を早くせん（お返事は如何ですか）」。嶼子答へて曰す、「更（すなは）ち言ふところ無し。何ぞ觸（ふれ）んか（心が動きました、Yesです）」。女娘曰す、「君、棹を廻すが宜し、蓬山に赴かむ」。嶼子従ひて往（ゆ）く。女娘、教へて目を眠（つむ）らしむ。

即ち不意の間にして、海中の博大なる嶋に至る。其の地、玉を敷くが如し。闕臺（高殿）は掩映（えんおう：重なり引きたち）し、樓堂は玲瓏（れいろう：光り輝く）す。目に見ざる所、耳に聞かざる所。手を携へ徐（ゆるり）と行くに、一つの太宅の門に到る。女娘曰（まう）す、「君且（ま）た此處（ここ）に立ちませ。」、門を開きて内に入りき。

即ち七人の豎子（童子）來りて、相ひ語りて曰す、「是は龜比売の夫なり」。亦（また）八人の豎子來りて、相ひ語りて曰す、「是は龜比売の夫なり」。茲（ここ）に女を知る。娘は龜比売と名（よ）ぶ。女娘出て來るに及びて、嶼子、豎子等の事を語る。女娘曰す、「其の七豎子は、昴星なり。其の八豎子は、畢星なり（昴宿の7星と畢宿の8星）。君、な恠（あや）しみそ」。即ち前に立ちて引導し、内に進み入りき。女娘父母共に相ひ迎へ、揖（手を合わせる挨拶）して坐を定む。斯に、人間と仙都の別を説き称（たた）へ、人と神の偶會の嘉を議し談（かた）る。

乃ち百品の尊味を薦め、兄弟姉妹等、坏を擧げ酥酬（そしゅう：酪酒）を獻じ、隣里の幼女等、紅顔にして戲接（ぎせつ）す。仙哥は寥亮（りょうりょう：透き通って遠く響く）とし、神儷は逶迤（いい：曲がり連なる）す。其の歡宴を爲すは、人間に万倍す。茲に日暮るることを知らず。但、黄昏の時に、群仙侶等、漸々退散す。即ち女娘獨り留り、肩を雙（なら）べ袖を接（あは）せ、夫婦の理を成しき。時に、嶼子、舊俗を遺（わす）れて仙都に遊ぶこと、既に三歳を経りぬ。

僕、虚談を以て（空言と思っていたが）、今、斯れ信（まこと）に然り」。女娘問ひて曰す、「君、歸へらむと欲（おもほ）すか」。嶼子答へて曰す、「僕、近く親故の俗を離れ、遠く神仙の堺に入りぬ。恋眷（れんけん：恋ひ慕ふ）に忍へず。輒（すなは）ち輕慮を申（まう）す。望（ねが）ふ所は、暫し本俗に還り、二親に拝し奉らむ」。女娘、涙を拭き歎きて曰（まう）す、「意は金石に等しく、共に萬歳を期（ちぎ）るに、何ぞ郷里を眷りますよ」。即ち相ひ携へて徘徊し、相ひ談（かた）りて慟哀（どうあい）す。遂に、袂を接（あは）せ退去し、岐路に就きき。是に、女娘父母親族、但、別れを悲しみ送りき。

女娘、玉匣（ぎよくこう：玉手箱）を取りて、嶼子に授け謂（かた）りて曰（まう）す、（した）ひて、棄て遺（わす）ること一時か（一時では済みませぬ、取り返しがつかな）な「君、終に賤妾を遺（わす）れずして、眷（かへり）み尋ね有らむとすれば、堅く匣を握りて、慎しみて、な開き見たまひそ」。即ち相ひ分れて船に乗り、仍ち教へて目を眠ら

しめき。 忽（たちまち）にして本土筒川郷に到りき。即ち村邑を瞻（み）眺（なが）むるに、人と物遷り易はり、更ち由る所無し。爰に郷人に問ひて曰す、「水江浦嶋子の家人、今、何処にか在る」。郷人答へて曰す、「君は何處の人ならむ、舊遠の人を問ふか。吾、古老等が曰ふを聞くに、先の世に水江浦嶋子有りて、独り蒼海に遊び、復た還へり來たらず。

今、三百餘歳を経るは、何ぞ忽に此を問ふか」。即ち棄心を銜（いだ）き、郷里を廻ると雖も、一（ひと）りの親に会はずして、既に旬月（10日）を逕たり。乃ち玉匣を撫（な）でて、神女を感思（おも）ひき。是に、嶋子、前（さき）の日の期（ちぎ）りを忘れて、忽ち玉匣を開きければ、即ち未だ瞻ざるの間、芳蘭の体（神女の精）、風雲に率（ゐ）られて、蒼天に翩（ひら）り飛びき。

嶋子、即ち期要を乖（そむ）き違へ、還りみて、復た会ひ難きを知り、首を廻らし踟躕（ちちゅう：行くに悩む）し、涙に咽（むせ）びて徘徊し、斯に、涙を拭（ぬぐ）ひて歌よみして曰（まう）す。

常世辺に 雲立ちわたる 水の江の 浦島の子が 言持ち渡る
神女、遙かに、芳しき音を飛ばして歌よみして曰す。

大和辺に、風吹き上げて 雲離れ 退（そ）き居（お）りともよ われ忘らすな
（大和のあたりで、風が吹き上がり、雲が分かれ 別々となろうと 私を忘れないでください。）

嶋子更ち、恋ひ望（おも）ふに勝（あ）げざるに、歌よみして曰す、

子等に恋ひ 朝戸を開き 吾が居（お）れば 常世の浜の 波の音聞こゆ。

（あなたを恋しくて、朝戸を開けると 私が居た常世の浜の 波の音が聞こえてきました。「子等」は女性を親しんで用いられる呼称。）

後の時の人、追ひ加へて歌よみして曰す。

水の江の 浦島の子が 玉くしげ 開けずありせば またも会はましを

水江浦島子が 玉くしげを開けねば またも会へたものを）

常世辺に 雲立ちわたる たゆまなくも はつかまと 我ぞ悲しき。

（常世辺に 雲が向かうこと 絶えることがないが あるのかないのか 私は悲しくなる。

「はつか」は有るか無いか分からない、やっとの義。心が弱って 思はず開けたこととかけているのであろう。）とあり、並みの文ではない。テキストや多様な字釈、解釈は浦島説話研究所（主宰 村山芳昭氏）。

解説：『丹後国風土記』（たんごのくにふどき）は、丹後国（現在の京都府北部）の風土記。逸書であるため、内容は『釋日本紀』などでの引用によるしかない。風土記編纂が命じられたのが和銅6年（713年）であるため、原本は遅くとも8世紀中にはできていたと思われる。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

丹後風土記のこの文は、伊預部馬養連（いよべのうまかいのむらじ）が丹波國宰（宰は後の国司、和銅六年(713年)丹後が分離する以前のこと）であった時に記したものによると云ふ。馬養は懷風藻の漢詩のなかで、「皇太子学士 從五位下 伊与部馬養一首 年四十五」と記しており、大宝二年(702年)に從五位下の官位で45歳で没したとみられている。689年6月に撰善信司に任命されている。

宋の范秦が「古今善信」三十巻を著はしたごとく、撰善信司は書物編纂のための新たな官職で、馬養はこれに抜擢された。また、691年～696年にかけて皇太子学士として輕皇太子の養育を任じられ、その後が不詳、後、大宝律令の撰定に加はっており、文武元年(697年)より文武三年の間、從五位下に相応しい丹波國宰に任じられたとみられるようである。その馬養を刺激するに足る絶好の説話が丹波、今の伊根町筒川にあった。馬養は神仙思想を巧みに取り込んで、常世という概念に彩りを与え、恋の歌を盛り込み、日本の感性を豊かにした。書紀神代下二巻の海底の宮殿（書紀巻2）などに通じる。

神仙のみならず、論語や楚辞のフレーズを取り込み、漁師であって風流の士でありながら、恋心にこころ乱れる、どこにも居そうな男が主人公。美麗にして比べることのできぬ女娘との永久（とわ）の生活に飽き足らず、すべてを失った男とその男を失った神女の嘆き。それを歌にしてそこはかとなき余韻を残す。歌物語の原形ではないか。別巻に在りとは、日本書紀とは別物であり、確証はないが日本紀の事なのかとも思う。

また、伊預部馬養連が、浦島子を日下部首等が先祖と記したことも目を引く。大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）の時代では、日下は草香であり、穴穗天皇（安康天皇）の時、無実の罪で滅ぼされた大草香皇子が居られた。大鷦鷯天皇（仁徳天皇）と日向髪長媛との間の皇子で妹が幡梭皇女であった。大草香皇子は新羅製の押木珠纒という冠を有し、難波吉師、日香蛟父子といふ家来がおり、半島との海運に携わっており、神日本磐余彦天皇（神武天皇）が生駒攻めを行った草香津、孔舎衛坂の地、河内国河内郡日下を拠点としていた。

この時代にあっては、日下氏の舞台は、万葉集にあるごとく住吉であって、丹波を連想することは難しい。ところが、この地の日下氏は陰謀により大草香皇子が殺されたこと、大草香皇子と中蒂姫（＝長田大娘皇女＝名形大娘皇女、穴穗天皇の姉）の子、眉輪王も殺されたこと、大泊瀬幼武天皇の妃となった大草香皇子の妹、幡梭皇女には子が無かったことにより先行き不安であったが、御名代として日下部が設けられていたようである。

わずかに残った大草香皇子の妻、眉輪王の母、穴穗天皇の皇后といふ運命を辿った中蒂姫に対しては、大泊瀬幼武天皇は十九年に穴穗部置き（書紀巻14）、保護をされていた。穴穗部からは後に用明天皇の皇后となった、穴穗部間人皇女がでるが、蘇我氏と物部氏の争いの難を逃れて、丹後町間人、「大浜の里」と呼ばれた今の「後ヶ浜」に上陸されたといふ伝承があります。

蘇我氏の領地であったとも穴穂部の領地であったもされるが、丹波は、従五位下の馬養が國宰を勤めており、当時は結構要所であった。難を避けるといふことでは、弘計天皇（をけのすめらみこと：顯宗天皇、けんそうてんわう）紀に市邊押羽皇子が殺された時、「帳内（とねり）日下部連使主（くさかべのむらじおみ） 【使主（おみ）は日下部連の名なり。 使主、此をば於瀾（おみ）と云ふ】 吾田彦（あたひこ）と【吾田彦 使主の子なり】 竊（ひそ）かに天皇（顯宗天皇）と億計王とを奉りて、丹波國の余社郡に避（さ）る」とあり、よくあったことなのかもしれません。

古事記によれば、日下部連の祖は、開化天皇の皇子、十一人の子を全国に配した日子坐王（彦座王）の子、沙本毘古（狹穂彦）である（書紀卷4）。日子坐王の子で、山代方面に展開した山代大筒城眞若王の後裔が氣長足姫尊（神功皇后）、室毘古の王は、若狹の耳別の祖、丹波比古多多須美知能宇斯（丹波道主命）は、丹波（たには）の河上の摩須郎女（ますのいらつめ）を娶して丹波方面に展開をしていた。日下氏の勢力が、すでに丹波にもあったことになる。かの伊預部馬養連が、浦島子を日下部首等が先祖とみたとなれば、浦島子は風流な一介の漁師ではなく、日子坐王の流れを汲む丹波の日下氏の風流の士、知識人であったのかもしれない。

ところで、狹穂彦王（さほひこのみこ、日子坐王（彦座王）の子）とは、記紀における皇族（王族）で、日本書紀』では狹穂彦王、『古事記』では沙本毘古王（さほびこのみこ）で、『記紀』では、垂仁天皇5年に妹の狹穂姫命（垂仁の皇后）に天皇暗殺を試みさせるが失敗し『叛乱を興すものの、追い詰められ兄妹ともに稲城の中で自殺しています。

また垂仁天皇と狹穂姫命との子（稲城で生まれた、不遇の本牟智和氣王むちわけのみこと）の説話もあり、この「狹穂彦王の叛乱」は、『古事記』における最も物語性の高い記述とされます。

この垂仁天皇と沙本毘古王の争いは、実は父親同士が、開化天皇の子（崇神天皇と彦座王）で、「直系」どうしの乱です。しかし『記紀』では「狹穂彦王の叛乱」であり新進勢力（近畿天皇家）対旧勢力最後（畿内銅鐸王国）の戦いとして描かれています。そうであれば、かの伊預部馬養連が、浦島子を日下部首等が先祖とみた浦島子は風流な一介の漁師ではなく、銅鐸王国の流れを汲む丹波の日下氏の末裔であったのかもしれない。（了）

解説：崇神天皇（すじんてんのう）は、稚日本根子彦大日日天皇（開化天皇）の第二皇子。母は伊香色謎命（いかがしこめのみこと）で後の物部氏の系譜に連なる。異父兄に彦太忍信命（磐之媛の祖）。異母弟に彦坐王（神功皇后の祖）。19歳で皇太子となる。

解説：開化天皇（かいかてんのう）即位6年、孝元天皇の妃（側室）だった伊香色謎命を皇后として御間城尊（後の崇神天皇）らを得た。また丹波竹野媛、和珥臣の祖の姥津命の妹の姥津媛を妃にしている。姥津媛との間には狹穂彦命、狹穂姫命、日葉酢媛命、神功皇后の祖となる彦坐王を得た。

伊根に伝わる浦島伝説「浦嶋子」



宇良神社に室町時代から伝わる『浦嶋明神縁起』。

宇良神社の由来を解説した絵巻で、浦嶋子が一人舟で釣りをしていると五色の亀が釣れ、亀が美女に変身した。その美女が蓬莱山(常世＝不老不死の理想郷＝龍宮城)へ浦嶋子をいざなっている場面。

二つの島を眺め、海岸沿いに北へしばらく行くと本庄浜という浜に出る。雲龍山[うんりゅうざん]が背後に聳え、筒川という小さな川が流れ込んでいる。それを遡るとのどかな田園風景のなかに宇良[うら]神社(浦嶋神社)の社がやがて見えてくる。昔話の浦島太郎はこの本庄の浜から龍宮城へと旅立ったといわれ、玉手箱や『浦嶋明神縁起』も神社に伝え残されている。

“むかしむかし 浦島は 助けた亀に連れられて りゅうぐう城へ来てみれば 絵にもかけない美しさ”と、童謡や昔話でお馴染みの浦島太郎。神社に古くから伝わるのは、そのルーツとなる浦嶋子[うらしまこ]伝説である。浦島太郎の話は室町時代に成立した御伽草子で、また明治になって巖谷小波[いわやさざなみ]が『日本昔噺』にまとめた。さらに小学校の教科書に掲載され、文部省唱歌や童話となって日本中で親しまれるようになる。物語も時代を経て変化し、教科書や童話のそれは教育的な配慮で、いじめられていた亀を助けたり、礼に報いる感謝の気持ちなどの徳育を折り込んだ内容になっている。

また浦島伝説も日本各地に数多く残る。そのなかでも伊根の地の伝承が発祥とされるのは、『古事記』や『日本書紀』『万葉集』にも登場し、とくに和銅年間に書かれた『丹後國風土記』(713～715年成立)の記述が浦島伝承の最古とされるからだ。『丹後國風土記』は現存しないが、鎌倉時代中期に書き写された逸文には、「与謝の郡、日置の里、此の里に筒川の村あり。この人夫[たみ]、日下部首等が先祖、名を筒川嶋子と云ひき。為人、姿容秀美しく、風流なること類いなかりき。斯は謂はゆる水の江の浦嶋子という者なり…」と記されている。

逸文を現代訳で要約すると、時代は雄略天皇 22 年(神代 478 年)の時、雲龍山の麓、筒川庄水の江の里に住む青年、浦嶋子は一人舟で釣りに出て、3 日 3 晩の後に五色の亀を釣りあげる。青年がうたた寝をしている間に亀は絶世の美女に変身し、嶋子は誘われるままに常世へと連れられる。美女の名は亀姫。嶋子は常世で姫と結婚し夢のような 3 年間を過ごす。やがて望郷の念にかられて一人帰郷する。亀姫はその別れ際に、決して開けてはならないと注意して玉櫛笥[たまくしげ]を渡す。嶋子が戻ったのはなんと 300 年後。すでに知る人もなく呆然としてつい玉手箱を開けると、若々しい肉体は瞬く間に天空に飛び

散った…。この話を耳にした淳和天皇(在位 823～833 年)が勅使に命じて嶋子を祀ったのが宇良神社という。

室町時代の『浦嶋明神縁起』の掛幅と南北朝時代から伝わる絵巻で、宇良神社の宮嶋宮司が絵解きをした浦嶋子伝承は、やはり今日的な昔話と多くの点で異なり現実的だ。それは、浦嶋子の祖先と記された日下部首[くさかべのおびと]とは、古代、丹後半島の海岸部を治め、大きな勢力を持っていたとされる海人[かいじん]で、日下部[くさかべ]一族を指す。海人とは漁労だけでなく、海を介して農業や養蚕、鉄などを扱うのに欠かせないさまざまな技術や文化を大陸と交流していた民と考えられている。

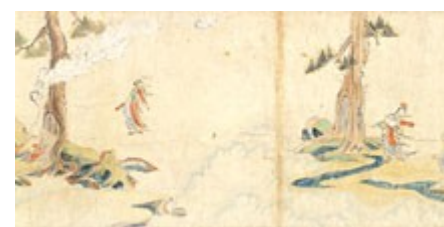
そして、宮嶋宮司は伝承の根底に流れるのは「中国の神仙思想です」と指摘する。神仙思想は日本固有のものでなく、不老不死を求める中国の道教の思想である。その理想郷とされるのが遥か東方海上に存在するといわれる常世の国、つまり蓬莱山(龍宮城)である。亀は中国では四霊の一つとして国と国とをつなぐ海神の使いであり、亀姫を仙界に住む神…と置き換えてみると、単なる昔話ではなく、古代の丹後半島と大陸との関係を少なからず読み取ることができるのではないだろうか。



浦嶋子が釣り上げたのは5色の亀。舟に引き上げ、複雑な面持ちの浦嶋子。すぐ上空を舞う鶴は、蓬莱の使者で吉兆を表す。



蓬莱山へとやってきた浦嶋子は蓬莱宮の中へと案内される。上空には天女が舞い、美しい装束をまとった女官が描かれている。この後、浦嶋子は美女の父母に認められ結婚する。



望郷の念にかられ、浦嶋子は故郷へ帰ってくる。あまりの変わりように驚き、洗濯をしている老婆に尋ねる。ついに玉櫛笥を開け、白い煙が出るとともに老人となってしまった。



浦嶋子は筒川大明神として祀られ、遷宮の賑やかなようすが描かれている。参道では田楽が舞われ、広場では相撲が行われている。

最後に、垂仁記の謎（今井俊圀氏）より、銅鐸王国の終焉説話を紹介します。

垂仁天皇（すいにんてんのう）は、即位2年に彦坐王（天皇の伯父）の娘の沙本毘賣（さほひめのみこと）を皇后とした。即位3年、纏向珠城宮に都を移した。即位5年に皇后の兄の沙本毘古王（さほびこのみこ）が叛乱を起こし、皇后もこれに従って兄と共に焼死した。というものです。

『古事記』では沙本毘古王の元に走った皇后は皇子を妊娠しており、稻城で生まれた皇子を渡しに外へ出てきたとある。天皇は屈強な兵士を差し向けて皇后を奪還しようとするが失敗。諦めきれない天皇は子の名付けや育て方、後任の皇后について尋ねて時間稼ぎをしたがついに話すことも無くなり泣く泣く稲城に火を放ち、皇后は兄と共に焼死した。とあります。

『古事記』の垂仁天皇の条に、銅鐸王国の最後の王（古田武彦氏）・沙本毘古王（さほびこのみこ）の妹である沙本毘賣（さほひめのみこと）と、伊久米伊理毘古伊佐知命いくめいりびこいさちのみこと（垂仁）との間の子、本牟智和氣王ほむちわけのみことの説話が出てきます。

まず、本牟智和氣王が、生まれつき口がきけなく、八握りまで伸びた髭（『日本書紀』神代紀の一書に「是の時に、素戔鳴尊、年已としみに長いたり。復八握鬚髯（やつかひげ）生ひたり。」の文があり、「握」は小指から人差し指までの幅で、8 cm～10 cm。八握は64 cm～80 cm）が胸に垂れるまでに成長してもまだ口がきけなく、ある日、空を飛ぶ鶴を見て言葉らしきものをつぶやいたので、垂仁が、配下の山邊の大鷗おおつるにその後を追わせると、鶴は木國（紀伊）、針間國（播磨）、稻羽國（因幡）、旦波國（丹波）、多遲麻國（但馬）、近つ淡海國（近江）、三野國（美濃）、尾張國（尾張）、科野國（しなぬのくに（信濃）、高志國（こしのくに（越）と飛んで、最後に山邊の大鷗が和那美の水門わなみのみなと（不明）で鶴を捕まえて、都へ持ち帰り献上したとする説話があります。

これらの地域は、沙本毘古王が支配した銅鐸王国の領域を示していると考えられます。もちろん、垂仁（本拠地：奈良県桜井市）によって銅鐸王国の中枢部である大阪府茨木市一帯が攻撃を受け、最後の銅鐸王国王・沙本毘古王が殺された後、それらの地域は順次、垂仁の支配下に組み込まれていったと考えられます。

又、本牟智和氣王が口がきけないとするのは、彼が垂仁の後継者としてふさわしくない人物である事を強調する目的で作られた説話と考えられます。これは垂仁の跡を継いだ景行によって作られたと考えられます。

次に、本牟智和氣王が口がきけないのを心配した垂仁の夢枕に、ある神が現れ「私を祀っている神殿を、天皇の御殿のように立派に修理するならば、皇子は口がきけるようになるだろう」と告げた。そこで、太占で占うと、この祟りは出雲の大神によるものである事がわかり、大神の宮を拝ませる為に、本牟智和氣王を出雲に差し向ける事にしたとする

説話は、沙本城制圧後、旧銅鐸王国を統治する為には本牟智和氣王が必要だったけれども、彼が成人する間に治安も安定したのでお役御免になり、簡単に殺す事も出来ないのも、出雲の大神宮に病氣平癒をさせるという名目で追放したという説話だと考えられます。

では何故出雲なのか？との問いに対する答えは、『出雲國風土記』仁多郡(島根県仁多町)の条に、三澤の郷、郡家の西南のかたじきょう五里なり。大神大穴持命の御子、阿遲須枳高日子命あじすきたかひこねのかみ、御須髪(みひげ)八握に生ふるまで、夜晝哭きまして、み辭通じつうはざりき。その時、御祖の命、御子を船に乗せて、八十嶋を率て巡りてうらがし給へども、猶哭き止みまさざりき。大神、夢に願ぎ給ひしく、「御子の哭く由を告らせ」と夢に願ぎませば、その夜、御子み辭通ふと夢見ましき。則ち、寤(さ)めて問ひ給へば、その時「御澤みさわ」と申したまひき。その時「何處を然いふ」と問ひ給へば、侖て、御祖の前を立ち去り出でまして、石川を度り、坂の上に至り留まり、「是處ぞ」と申したまひき。その時、其の澤の水活れ出でて、御身沐浴みましき。故、國造、神吉事奏しに朝廷に参向かふ時、其の水活出でて、用ゐ初むるなり

とあり、大穴持命の子の阿遲須枳高日子命あじすきたかひこねのかみが、成人するまでの夜泣きが止まらず口がきけなかったで、夢に願うと、その夜、御子の口がきけるようになった夢をみた。それで、目覚めて御子に声をかけると「三澤」と言った。「何処の事か」と問うと、御子は立ち上がり戸外に出て、川を渡り坂の上に立ち止まり「ここ」と言った。その沢の水で沐浴している内に、口がきけるようになったとする説話です。

そこは、島根県仁田町の三沢町原田にある「三津田の泉」とされています。ほとんどこの本牟智和氣の説話と同じであり、出雲の説話が近畿地方でも有名であり、それを垂仁が利用したのだと考えられます。

また古田武彦氏は、『よみがえる卑弥呼』の中でこの説話を紹介し、「朝廷」とあるのは、一般的に言われている「大和の朝廷」ではなく、「出雲の朝廷」であるとしています。

その後、出雲から本牟智和氣王が都(大和)に戻った形跡がありません。本牟智和氣王の記述が途絶えるのです。彼が都に戻ったのなら、当然、垂仁の後を継いで天皇になるはずですが。しかし、跡を継いだのは景行でした。：垂仁記の謎(今井俊罔氏)より部分掲載

解説：日下部氏(くさかべうじ)は、日本の氏族のひとつ。家紋は三ッ盛木瓜、蔦。起源にはいくつかの系統がある。

- 1、饒速日命の孫・彦湯支命(比古由支命)の後裔。物部氏の一族。
- 2、開化天皇の孫・山代之大筒木真若王(彦坐王の子)に始まる、但遅麻国造族の日下部君(『古事記』、『大日本史』)。
- 3、開化天皇の孫・狭穗彦王(彦坐王の子)に始まる、甲斐国造族の日下部直、河内の日下部連。
- 4、孝徳天皇の孫・表米親王(日下部表米)に始まる、日下部宿禰の後裔(『朝倉始末記』)[1]。

- 5、大彦命の子・紐結命に始まる日下連。
- 6、若多祁命の子・田狭乃直に始まる伊豆国造族の日下部直。
- 7、天日和伎命の6世孫・保都祢命の末裔の日下部首。

2・3の系統はいずれも彦坐王の後裔とされている。また山代之大筒木真若王後裔説と孝徳天皇後裔説のどちらも表米以降の系譜はほぼ同じであるが、部民制度の成立を考えた場合にとくに4の孝徳天皇後裔説は疑問点が多いとされる[2]。

また、雄略天皇の皇后であり仁徳天皇の皇女でもある草香幡梭姫が生活する資用に充てられた料地の管理等に携わった部民が、この皇后の名に因む（いわゆる名代部）とする説がある。そして、この部民は各地に配置されて屯田兵のような軍事集団の性格を持つものでもあったとされる。

くさかべ（日下部）の表記は、和歌の枕詞、「日の下の草香（ひのもとのくさか）」より生じた表記と言われる。同様の表記には「長谷の泊瀬」、「春日の滓鹿」、「飛ぶ鳥の明日香」などがある

伊根の海岸から望む2つの小島、冠島と沓島は神聖な島。天然記念物オオミズナギドリの繁殖地としても知られる冠島は、伊勢の大神が最初に天降りした場所とされ、伊勢の大神が天に昇っていく時、被っていた冠を残したのが冠島で、靴を残したのが沓島だと言い伝えられている。

解説：開化天皇（かいかてんのう、孝元天皇7年 - 開化天皇60年4月9日）は、日本の第9代天皇（在位：孝元天皇57年11月12日 - 開化天皇60年4月9日）。『日本書紀』での名は稚日本根子彦大日天皇。欠史八代の一人で、実在性については諸説ある。

大日本根子彦国牽天皇（孝元天皇）の第二皇子。母は皇后で鸞色雄命（内色許男命、穂積臣遠祖）の妹の鸞色謎命（うつしこめのみこと、内色許売命）[1]。同母兄弟には大彦命・少彦男心命・倭迹迹姫命、異母兄弟には彦太忍信命・武埴安彦命がいる。16才で皇太子となる。

父帝が崩御した同じ年の11月に即位。翌年、春日の率川宮に都を移す。以前の都とは大きく離れた大和盆地の北に位置している。

即位6年、孝元天皇の妃（側室）だった伊香色謎命を皇后として御間城尊（後の崇神天皇）らを得た。また丹波竹野媛、和珥臣の祖の姥津命の妹の姥津媛を妃にしている。姥津媛との間には狭穗彦命、狭穗姫命、日葉酢媛命、神功皇后の祖となる彦坐王を得た。即位60年、崩御。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：巖谷小波（いわや さざなみ）作の（『日本昔噺』第18編）：桃太郎、舌切雀、新羽衣、花咲爺、かちかち山、浦島太郎、一寸法師、養老瀧、猿蟹合戦、瘤取り、金太郎、文福茶釜、うさぎと亀、虎の児、かぐや姫、俵藤太、牛若丸、物臭太郎